

**2173再構築 10**

**ララの人物造形2**

**エリー**

理屈というのは、計算式のようなもので、やり方を知っていれば、誰でも同じ答えになる。

$$1 + 1 = 2$$

「数字」と「+」や「=」の意味を知っていたら同じ結論がでる。

小学生のころに、

1つの粘土と1つの粘土を合わせたら、1つの粘土になった。

だから、 $1 + 1 = 1$ だ。

という授業を受けたけれども、結局は、「量が2倍だから2だ」に落ち着く。

つまり、 $1 + 1 = 2$ なのだ。

人の数なら、1人と1人で2人になる。

リンゴの数なら、1個と半分で、1.5個になる。

では、「可能性」や「感情」なら？

人によって値は変わるだろう。

「好きな数字を入れてください」と言われたら、大半の人は、0から9から選ぶ。

好きな選手の背番号だからという理由で、二けたを言うことはあるかもしれない。

しかし、19730522とかは言わないだろう。

3分の2とか、0.1とか、-90を上げる人もめったにいないだろう。

「想像できる範囲」というのは、案外に狭いものだ。

-----

「理屈を根拠に主張する」場合、「 $1 + 1 = 2$ 」だから「2だ」と訴えることになる。

何度考えても、最初の数字は1で間違いないし、加える数字も1で間違いないのだから、答えは2で絶対正しい！

そんな風に、同じ理屈を繰り返し考え続けて、確信を深めることも、「考える」という。

そういう「考え方」をしている時に、結論だけ言い合って、「いや、3じゃないの？」と突っ込まれれば、「なぜ、こんな簡単な理屈が分からない。バカなのか？」と相手を否定するだろう。

。

仮に「 $1 + 2 = 3$ なんだから、3なんじゃないの？」と過程を説明しても、「わたしは $1 + 1$ の話をしているのだ。人の話を聞かないやつめ！」とやっぱり批判的になるだろう。

そうするとたいてい、「 $a + b = c$ 」なのだから、「どっちも間違っていないよ。同じ話をしていることが分からないなんてバカなんじゃないの？」みたいな、抽象化する方向で批判が始まる。

具体的な数字を当てはめていくことで、いろいろな説が出てくる。それらを集めて一つにまとめると、普遍性のある「公式」が見つかる。

たとえば、「数字と数字を加えると、数が大きくなる場合がありますが、マイナスの数字を加えると減るという結果になります。つまり、プラスか、マイナスかは重要な要素なわけです」みたいな解説をすることができる。

具体的な数字を入れずに、「数字全般の性質」を使って話を進めていく。

公式をしっていて、その働きを把握していることは大切だ。

しかし、実際に行動する段階になったら、抽象的なままでは動けない。具体的な数字が求められる。

-----

繰り返しになるが、「 $1 + 1 = 2$ 」を繰り返し確認することは、「考えている」という。しかし、ひどく視野が狭い。

いろんな数字を当てはめてみたり、「 $-$ 」や「 $\times$ 」や「 $\div$ 」を当てはめてみたり、連立方程式にしてみたり、いろいろな視点から考えることも「考えている」という。

こちらは、視野が広い。

もし、「 $+$ 」しか知らなければ、他の角度から見ることにはできないので、まずは「知ること」が求められる。

しかし、「たくさん知っているだけ」では、この場面で何を選べばいいのか分からない。

だから、「たくさん知っているだけ」より「知っていることは少ないけど、使いこなせることがある」方が、役立たせることができる。

「下手の考え休むに似たり」というのは、「 $1 + 1 = 2$ 」が頭の中をグルグルまわっているだけで、そこから動けなくなっている状態を指しているのではないだろうか。

数字を変えたり、記号を変えたり、数式を組み合わせたり、展開していくことができない。

-----

人は、「 $1 + 1 = 2$ 」を思っている時に、それをいったん受け止めてくれないと、次の話にすすめない。

1人で考え続けて、「 $1 + 1 = 2$ しかない！」という結論に至ったとしよう。

そこで「あなたは $1 + 1 = 2$ と考えているんだね。確かにそれは2になるね。じゃあ、1を2に変えたらどうなる？」と質問されたら、「違う可能性」に目を向けるかもしれない。

しかし、「3になる答えを探してみろ」とか、いきなり話を飛ばされても、「人の話を無視した」という不満を持ちやすい。

面白さを追求したら、同じ言葉をオウム返しに繰り返すことは避けるべきことだろう。

しかし、小さな子どもと接する時や、悩みを抱えている人と接する時などは、オウム返しは大切な役割を果たす。

「確かに、耳を傾け、主張を理解した」を伝える手段になるからだ。

-----

視野が狭くなる現象は、理屈ではなく、感覚でも起きる。

「わたしなんて、価値はないのだ」は、「本人がそう感じている」という以上に意味がない。感覚は理屈と違って、全員が同じ結論を共有できるわけではない。

自分とは違うかもしれない。

だから、「その人はそう思っている」と信じられないと、話を続けることが難しい。

本音を言っていない、わざと大げさにいっているだけ、などと思ったら聞きたくない。

また、本音だと信じられたとしても、「特に何もおもっていない」なら言われても困ってしまうし、「確かに価値がないね」と思ってもそれをバカ正直に言わないだろうし、「価値がある」と思えば相手の感覚を否定して自分の感覚を認めさせたくなるだろう。

なかなか「あなたはそう思っているんだね」と同じ立場に立って話すことは難しい。

-----

「 $1 + 1 = 2$ だ」みたいな、根拠のある主張は、誰が考えても同じ結論になると思うから、主張することが易しい。

しかし、「1」という数字を選んだ「感覚」は、その人だけかもしれない。

「大勢の人がそれを選んでいる」という根拠があったとして、「違う数字である可能性」がゼロになるわけではない。

ところが、「1なのか、2なのか」を探る話と違って、「 $1 + 1 = 2$ だ」と理屈を主張する話は、「絶対に正しい」と思いやすい。

そして、結論をぶつけ合って、否定し合う不毛な争いに発展する。

-----  
「わたしの価値」みたいな感覚の話は、自然に湧き上がってくるものなので、自分の意志でコントロールすることが難しい。

「もっと自信を持ちたい」と思えば、「わたしには、あれも、これもある。だから価値があるのだ」という理屈に頼ることになるだろう。

しかし、それは、「実感を持っていること」ではないから、「安心」につながりにくい。

反対に、いろいろ持っている人なのに、「わたしにはなにもない」と主張する人がいたとしよう。

「だからだめなんだ。そして、入手することはできない＝永遠にこのまま」という意識に縛られて、苦しんでいたとしよう。

他人が、あるものを一生懸命あげていっても、「そんなものは誰にでもあるし、普通だよ。価値があるとは言えない」となったら、心は変わらない。

普通だと思っていたものを失えば、「あの時はよかった」と気づくかもしれない。

しかし、「今はないし、これからもずっとない」という現実が待っている以上、「だからわたしには価値がある」とはならないだろう。

せいぜい「かつては今より価値があった」程度の認識しか生まれえない。

では、どうしたら、自分で自分を認められるのか？

「視野を広く持って、いろいろな面から考え尽くして、総合的な結論を自分で出して、実践していく」という、言葉にすると単純だけど、続けることは難しいこと、「生き方」で決まるのではないか。

「 $1 + 1 = 2$ だから、 $2$ にするべきだ」と結論を押し付けられて生きるくらいなら、誤った計算式を用いたり、答えを間違えたり、失敗した方がまだまし。

でも、最初に数字や記号などの意味を教えられなければ、自分で考えられるようになることは難しいだろう。

繰り返し計算して、練習しなければ、身につかないだろう。

正解・不正解を判断して、反応を返してくれる人がいなければ、実力がついたか分からないだろう。

では、どこまで教えて、どこから考えさせるのか？

-----

たぶん、年齢ではないのだと思う。

視野が広く、自分で考えて、自分で決めて、実践できる人は、自分で自分を育てることができる。放っておいても大丈夫だし、放っておいた方がよい。

しかし、「 $1 + 1 = 2$ 」が繰り返し頭の中を巡るだけで、狭い視野から抜け出せない人には、助けが必要だ。

「わたしは、 $1 + 2 = 3$ だと感じる」「いや俺は、 $1 - 1 = 0$ だな」などと、感覚が異なる人の話を聞くことで、解決するケースは多い。

では、話の輪に入らず、自分で思いつくこともできず、いつまでも「自分の理屈」だけを見つめ続けて、他人を否定する状態に陥ったらどうしたらいいのか？

昔は、指摘して気づかせるべきなのかなって思っていた。

自分が指摘されることに抵抗がなかったし、それで変わるきっかけになることが多かったから。

しかし、ますます頑迷になるタイプもいる。「自分の世界に引きこもらなければならない時期」というのがあるのだろう。

今は、「相手の態度が自分にとって嫌なことなら距離をおいて自分を守り、相手が問題に気づいて問いを発したら対応する」でよいのではないかと思う。

押し付けはよくないし、我慢するのもよくないと思うようになった。

わたし自身は、いろんな話をして、いろんな人に「どう思う？」と聞くことが好き。気づかないことに気づくと面白く感じる。

しかし、そんな関係は特別であり、打ち捨てることも必要なのだと学んだ。

だから、打ち捨てられてもしょうがないし、挨拶程度ですます距離感も必要だ。

全部を同じにしようとしたら駄目なのだとやっと学習した。

「なんとなく気になって見守りたい人」や「見守ってくれる人」を大切にしたい。

それ以外は、必要最低限で関わっていけばよい。

「特別な関係」は、物理的な距離よりも、心が決めるのだと思う。

身近にいても、非難し合うばかり、不満をぶつけ合うばかりでは、辛く寂しい。  
しかし、切り離せない難しさのない遠い関係の方が理想化しやすいのも事実。  
それでも、身近な人間関係をきちんとした上で、遠い関係を楽しむなら、意味があるのだろう。

====

ララは、視野が狭くなりやすいタイプ。  
ボナ先生が、ララの気持ちを受け取り、心を広げて行ってくれる。

「弱い自分は価値がない」と思い込んでいる状態から、自分が存在することを肯定できる状態  
に変わるのが、大きな変化なんだろうな。  
でもそれは、13歳までに終わっている方がいいのではないかな？

----

作者のエリーは、現実世界で占い師をしている。  
2011年に始めたけど、最初のころは知識も技術も未熟で、「これでいいのかな？」と迷い  
ながらしていた。

「お客さんはどう思っているのだろう」という疑問でいっぱいだった。

しかし、本を読んだり、教室に通ったりして、前より答えられることが増えた。  
「この質問には、この占い」と判断もつくようになった。  
すると、それまで見えなかった、お客さんの様子が感じられるようになった。

基本的に、「する・しない」など、迷っているから、「占って欲しい」と思う。  
それに対して、「出た答え」は重要ではない。それを聞いた時の、「お客さんの心の声」が  
重要。

「本心はなんなのか？」から、「だからどうするか？」を決めるまでに、わたしはわたし自身  
を見せて、一定の価値観を示し続けることが役割なんだと思う。

お客さんはどれだけ迷ってもいい。わたしがずっと同じ場所に立ち続けることで安心して歩  
き回ってもらう。そんなものなのだと思うようになりました。

そういうのは、占いの知識だけではどうにもならない。実際に、悩んでいる人に接してみない  
と身につかない態度。

そう考えたら、ララが16から26まで、お金をもらって、対面鑑定やネット鑑定をしてきた  
なら、もっと堂々とした人物像じゃないとおかしい。

ウダウダ小さなことを悩む姿は、占い師としてふさわしくない。

「だから、売れない占い師だった」という設定にもできるけど、「好きな歌手を追って自由区に飛び出す」とか、「好きな人に出会って関係を持つ」とか、思い切ったこともしている。

なんかこう、全面的に考え直して、「だめなところから成長する物語」ではなく、「成長したララが未来世界で力を尽くす姿」にした方が、「樂園を書く」というテーマにふさわしい気がしてきた。

成長したララを書くためには、自分が成長しなければならないので、無料鑑定で経験を積むことが、今、わたしにできること。

いつララの新しい人物像ができるか分からないので、今感じていることをメモしておきます。